

三宅島ふるさとだより

No. 25

平成23年11月1日 三宅島ふるさと再生ネットワーク東京事務局 TEL 03(3963)5678 Fax 03(3963)5697

住所：〒173-0005 東京都板橋区仲宿25-6 あすなろ福祉会内

10月19日(水)にふるさとネットの世話人会が巣鴨で行われ、その中で訪問活動の報告が行われた。その一部を紹介します。

～持病や金銭面の苦勞を抱えた都会生活～

○町田市在住のAさんは、三宅島に家と畑があり、島に住む友人に様子を見てもらったり貸したりしているという。足が悪いため訪問員と行っていた買い物は、近所に住む親族が一緒に行ってくれるようになったとのこと。また、島の友人と電話で話したり、近くに住む友人とお茶会をしたりすることが多いとのこと。最近持病が悪化しており、入院するかもしれないと話していた。島に戻りたいという気持ちはあるが、持病や金銭面を考えると、生活は難しいという。

○東村山市在住のBさんは、現在一人暮らし。近所に友人が多く、週末にはお子さんが泊まりに来てくれることもあって孤立している様子はない。膝が悪く、耳鳴りや頭痛の症状もあるため、定期的に通院しているとのこと。島のことを楽しそうに話しているものの、「体調面や年齢のことを考えると帰島は難しい」と話している。

○北区在住のCさんは、島に家があるが2006年以降帰っていないとのこと。「島に戻りたい」という気持ちはある。東京で何か震災があった時に備えて、島に残した家はそのままにしてあるという。

○北区在住のDさんは、妻と同居している。夫婦ともに通院していることもあり帰島することは出来ず、「島に帰ることは考えていない」と話していた。今年に入って新居に引っ越し、風通しが良くなり快適に過ごしているとのこと。

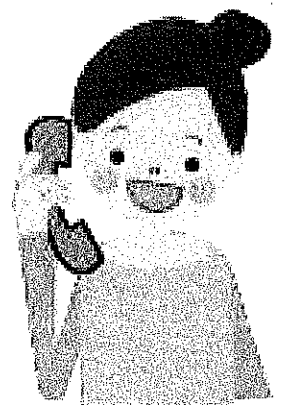
○相模原市在住のEさんは、避難前にすでに現在の住所に移り住んでいる。一人暮らしだが、近所に住む身内や友人とコミュニケーションがとれており、時折ご家族も遊びに来てくれるとのこと。持病もなく、散歩などで適度な運動を心がけているという。島にいた期間が短かったことや現在の生活に満足していることもあり、島への未練や執着はないようであった。その他様々な事例が報告された。

～11月のアンケート活動を機に

「ふれあいコール」で新たに状況把握～

ふるさとネットでは、地域ごとにチームに分かれて訪問活動を行っている。なかなか訪問することもできないが2000年噴火から11年もたつと、様々な変化が起きている。訪問活動を申しわけないと遠慮する方や家族の協力で生活の自立ができている方もいる。

しかし、独居高齢者にとっては、都営住宅の建て替え移転など1人で出来ないことも続いているので、アンケート活動や「ふれあいコール」などをすることで、きめ細かく訪問活動が必要な人を確認し、もう一度リストを作り直す作業などが話し合われた。



緩話

急題



科学部次長
佐藤 良明

9・11同時テロから10年、東日本大震災から半年の節目が近づいた。世界を見渡せば災害や大事故も起きており、災厄に鈍感ではない。そうした危機には、命にかかわる決定的瞬間があるが、生死を分ける要因は何が。生存者の体験は私たちへの教訓になる。米国のジャーナリストが、大惨事の生存者から聞き取りした証言内容は、いくつが出版され、邦訳もされて知られている。

同時テロでは、世界貿易センタービル81階から男性がたどり着き、生還した。男性は突っ込んでくるユナイテッド機と「こらめ」と

大惨事から助かるには

体験談に触れ、心の準備

「急な引き潮」「水平線上の泡立ち」など津波の特徴を覚えていたため、来襲を察知してホテルの上層階に避難し、助かった。（「生き残る判断」生き残れない行動）

危機に際して人は、心理学でいう「正常化バイアス」に、最初はどうも「火災報知機が鳴っても誤作動だろう」と思っただけで逃げない心理に象徴され、危険を軽視し、よつとする。その結果、生命の危機に陥るが、そんな中から、生存者たちは教訓を見いだしている。

「自分のできることを、ひたすら（つ）」

2004年スマトラ大津波の時、タイ・プーケットで休暇中の英国人一家は、小学生の娘が、たまたま直前に地理の授業で習った

「周囲との協力」

「生きようという強い意志」

災害の常襲地帯なら、この教訓

験になり心構えができるという。

8月下旬、都内の防災関連シンポジウムをいくつかのぞいた。一番印象的だったのは、岩手県釜石市立釜石東中の生徒が、3・11の津波体験を話した集まりだ。

生徒たちはまず、学校から約500m離れた福祉施設に避難し、次に高台の介護施設へ、さらにも

「急な引き潮」「水平線上の泡立ち」など津波の特徴を覚えていたため、来襲を察知してホテルの上層階に避難し、助かった。（「生き残る判断」生き残れない行動）

危機に際して人は、心理学でいう「正常化バイアス」に、最初はどうも「火災報知機が鳴っても誤作動だろう」と思っただけで逃げない心理に象徴され、危険を軽視し、よつとする。その結果、生命の危機に陥るが、そんな中から、生存者たちは教訓を見いだしている。

「自分のできることを、ひたすら（つ）」

2004年スマトラ大津波の時、タイ・プーケットで休暇中の英国人一家は、小学生の娘が、たまたま直前に地理の授業で習った

「周囲との協力」

「生きようという強い意志」

災害の常襲地帯なら、この教訓

験になり心構えができるという。

8月下旬、都内の防災関連シンポジウムをいくつかのぞいた。一番印象的だったのは、岩手県釜石市立釜石東中の生徒が、3・11の津波体験を話した集まりだ。

生徒たちはまず、学校から約500m離れた福祉施設に避難し、次に高台の介護施設へ、さらにも

2011年9月9日(金)
読売新聞

「『大丈夫、ここまでは（津波は）来ねえぞ』と誰かの声を耳にした。国道の真ん中にもかかわらず、その場にしゃがみこんだ」

被災地から離れた都会の人たちに、年若い生存者が直接語りかける機会が、そう多くない。当時を思い出し、涙をこらえて話す中学生たちに、約200人集まった会場は声もなく静まりかえった。

当事者の生の声を聞く――小さな実践だが機会を見つけた。生死にかかわる判断ミスをしないう「生存力」を、私たちが身につける。弱者（よる）からいかに。